

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02336

研究課題名（和文）能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相 『入門者摘録』（全2冊）研究

研究課題名（英文）Aspects of transmission and reception of Kanze noh hayashi, taiko school: A study of the two-volume Ny&#363;monsyatekiroku(record of new disciples)

研究代表者

三浦 裕子 (Miura, Hiroko)

武蔵野大学・文学部・教授

研究者番号：30646287

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：『入門者摘録』（全2冊）は能楽囃子太鼓方観世家が所蔵する資料で、今までまったく知られていなかったものである。本研究は、第一に、この資料が、文化6年（1809）11月から昭和21年（1946）5月迄の約140年間、太鼓方観世家に入門した1114名に関する情報（姓名・家系・紹介者・入門日・伝授曲など）の記録であることを明らかにした。第二に、この資料を用いて、太鼓方観世流の19世紀から20世紀半ばまでの伝授と受容の諸相を調査した。また、明治維新により衰微した能楽界で、太鼓方観世流が活躍の場を広げた経緯を追究し近代能楽史の一端を解明した。なお、本研究は初代梅若実資料研究会が共同で行ったものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に、今までまったく知られていなかった『入門者摘録』（全2冊）（能楽囃子太鼓方観世家蔵）について、解読と翻刻を通じて、その資料的価値を明らかにしたことである。第二に、この資料を用いて、能楽囃子太鼓方観世家と弟子との間の伝授と受容の諸相について調査したこと、第三に、太鼓方観世流が明治期に活躍した経緯などの近代能楽史の一端を解明した点にある。

現在でも能楽ほかの伝統芸能の世界では伝授と受容に関する厳格な慣習が守られている。さまざまな事柄が激変した近代の能楽は、今日の能楽の根幹をなすものである。そのうちの伝授と受容について着目したところに本研究の社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：The existence of the two-volume Nyuumonsyatekiroku, in the possession of the Kanze taiko school, was previously unknown. This study outlines the contents of the document, which contains records of 1114 new disciples of the Kanze taiko school, spanning a period of roughly 140 years, between 1809 and 1946. These records include data sets of a disciple's name, referrer, day of initiation, and plays studied/transmitted. Taken as a whole, the document provides a means to look into the aspects of transmission and reception of the art in the Kanze taiko school, from the early 19th to the mid-20th century. Thus, this study has the potential to unravel a part of modern noh-gaku history, by investigating the circumstances by which the Kanze taiko school could succeed in expanding its influence, in the context of a noh-gaku world that was already in steep decline by the outset of the Meiji Restoration. The study was conducted as a joint research project with the First Umewaka Minoru Study Group.

研究分野：能・狂言

キーワード：能・狂言 能楽 太鼓 中世芸能 伝統芸能 囃子

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代能楽の研究の促進

シテ方観世流能楽師であり梅若家 52 代当主であった初代梅若実 (1828~1909) が嘉永 2 年 (1849) から明治 41 年 (1907) までの約 60 年間を記した日記は、当時の能楽について詳述する大変に貴重な資料である。その翻刻が『梅若実日記』(全 7 巻)として平成 14・15 年 (2002・2003) に八木書店から刊行された。これにより近代の能楽に関する研究が飛躍的に進んだ。

報告者は当初から編集委員としてこの翻刻作業に参加し、『梅若実日記』を用いた近代の能楽に関する研究を進めている。

(2) 初代梅若実資料研究会による初代梅若実および梅若家における伝授と受容の諸相の解明

報告者は平成 15 年 (2003)、武蔵野大学能楽資料センター内に「初代梅若実資料研究会」を設立し、初代梅若実関連の資料に基づく研究を共同で行っている。

その代表的な成果として以下の 2 点があげられる。

初代梅若実筆『入門性名年月扣』の翻刻・解読

弘化 2 年 (1844) から明治 40 年 (1907) に梅若家に入門した素人弟子約 1000 名についての身分・職業などを調査し、その人物像を明らかにした。

これに関する成果に以下がある。

「『入門性名年月扣』翻刻及び解説 (1)~(5)、人名索引・補遺」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 15 号~第 20 号、初代梅若実資料研究会、2004 年~2009 年)。

平成 25 年度 (2013) 採択の科学研究費助成事業 (基盤研究 (C)) 「近代における能楽の伝授と受容の諸相 免状に見る梅若家と素人弟子」(報告者が研究代表者)の研究を推進し、梅若家に入門した素人弟子に発行した免状の種類・年月日などを記した『伝授免状扣』(全 2 冊)(梅若六郎家蔵)の翻刻と解読を行った。

そのうえで、シテ方観世流宗家の弟子家という立場にある梅若家が免状を発行するようになった経緯や意味を、歴史的・文化的背景を視野に入れつつ考察した。

これに関する成果に以下がある。

研究成果報告書『近代における能楽の伝授と受容の諸相 免状に見る梅若家と素人弟子』(編集・発行、三浦裕子、146 ページ、2017 年)。

(3) 能楽囃子太鼓方観世家蔵『入門者摘録』(全 2 冊)の発見

能楽囃子太鼓方観世家(以下、太鼓観世家とする)は慶長頃から存続する名家で、16 世紀末頃から現代にかけて記された約 1000 点の資料を所蔵している。昭和 30 年代 (1955) より表章氏ら能楽研究者が何度も調査に訪れ、おもに江戸時代の資料を用いた研究が行われた。

報告者は平成 22 年 (2010) から毎年、太鼓観世家が夏季に催す虫干しに参加し資料の調査を続けている。その際に『入門者摘録』(全 2 冊)という、今まで存在がまったく知られていなかった資料を発見した。

(4) 太鼓観世家 14 世観世元規に関する研究の蓄積

太鼓観世家での調査を継続的に行った結果、近代の能楽において太鼓観世家 14 世の観世元規の存在が非常に重要であり、元規関連の資料を太鼓観世家が数多く所蔵していることが判明した。そこで、14 世元規に関する研究を進め、以下のような発表を行った。

口頭発表「観世元規著『観世流太鼓手附』の意味と機能」(パネル "Towards Transparent Translation: Modern Mediations of Noh"、アジア研究協会 (AAS) 70 周年記念大会、アメリカ・ハワイ、2011 年)。

口頭発表「観世流太鼓方・観世元規 その生涯と事績をめぐって」(能楽学会第 12 回大会、東京、2013 年。要旨を『能と狂言』[第 12 号、138 頁、2014 年]に掲載)。

研究ノート「観世元規著『観世流太鼓手附』考 『観世流太鼓手附』と『太鼓手附諸流異同弁 全』との関係を中心に」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 26 号、14~22 頁、2015 年)。

2. 研究の目的

(1) 『入門者摘録』(全 2 冊)の翻刻と解読を行い、資料的価値を明らかにする。

前述したように、『入門者摘録』(全 2 冊)は今まで存在がまったく知られていなかった資料である。そこで、この資料の翻刻と解読を通じて資料的価値を明らかにする。

(2) 囃子方の宗家が弟子に行った伝授と受容の諸相を考察する。

平成 25 年度 (2013) 採択の科学研究費助成事業 (基盤研究 (C)) 「近代における能楽の伝授と受容の諸相 免状に見る梅若家と素人弟子」で、初代梅若実資料研究会は、シテ方観世流梅若家の素人弟子の伝授と受容の諸相を考察した。

本研究ではその実績を踏まえ、『入門者摘録』(全 2 冊)などを用いることで、研究の対象を広げ、囃子方の宗家と素人弟子・玄人弟子との間の伝授と受容の諸相を考察する。

(3) 太鼓観世家が所蔵する近代以降の資料を調査しデータベース化に向けたリスト作成を行う。

太鼓観世家が所蔵する約 1000 点の資料のうち、今まであまり研究の進んでいなかった近代以降のものを中心に、データベース化に向けたリスト作成に着手し、書誌・内容などの確認作業を進める。

3. 研究の方法

(1) 共同研究を行う。

初代梅若実資料研究会による共同研究を行う。研究会の当初のメンバーは小林責・加賀谷真子・氣多恵子・土谷桃子・中司由起子・深澤希望・別府真理子・三浦裕子の 8 名であり、三浦(報告者)を研究代表者、他の会員を研究協力者としている。現在は研究協力者に高橋葉子が加わり、氣多恵子・小林責が退会したため、最終的なメンバーは 7 名となった。

(2) 『入門者摘録』(全 2 冊)を撮影しデジタル化を進めることによる研究の能率化を図る。

『入門者摘録』(全 2 冊)を撮影し、資料のデジタル化を進めることによって共同研究を行う基盤を整え、研究の能率化を図ることとした。

(3) 初代梅若実資料研究会による定例研究会を開催する。

以下の目的で定例研究会を年 5 回程度、開催する。

デジタル化された『入門者摘録』(全 2 冊)を用い、共同してその翻刻を行う。

『入門者摘録』(全 2 冊)の索引(人名・曲名・その他)を作成する。

『入門者摘録』(全 2 冊)などを用い、太鼓観世家と弟子との間の伝授と受容の諸相を解明する。

のうち、とくに近代における太鼓観世家と弟子との関係を解明する。

(4) 夏季の虫干し時などにおける太鼓観世家の資料調査を行う。

太鼓観世家蔵の資料全体にわたる調査を行い、各資料の書誌情報をカードに記録するなどして全体像の把握につとめる。

太鼓観世家蔵の資料を封入している従来の封筒を中性紙のものに差し替え、収納ケースを取り換えるなど、より安定的な保存のための処置を施す。

4. 研究成果

(1) 『入門者摘録』(全 2 冊)の資料的価値の解明

資料名の命名

『入門者摘録』は全 2 冊におよぶ資料である。第 1 冊には書名に関する情報はないが、第 2 冊の内題に「明治以降入門者摘録」と記されている。そこで第 1 冊を『入門者摘録・第 1』、第 2 冊を『入門者摘録・第 2』、両者の総称を『入門者摘録』(全 2 冊)と報告者が仮に命名した。

書誌

『入門者摘録・第 1』『入門者摘録・第 2』には同質の茶紙表紙が用いられている。

寸法はともに縦 127 mm × 横 185 mm である。

墨書がほとんどであるが、まれに朱書が見られる。

遊紙があるものの墨付だけを数えると、『入門者摘録・第 1』が 101 丁、『入門者摘録・第 2』が 75 丁である。

内容と価値

『入門者摘録』(全 2 冊)は、文化 6 年(1809)11 月から昭和 21 年(1946)5 月までの約 140 年の間、太鼓観世家に入門した記録のある 1114 名(入門者としては 1573 名の記録があるが、重複する人物がのべ 459 名あり、その人数を差し引いた人数)の弟子の情報を、氏名のいろは順に記録したものである。その情報とは、姓名・身分・家系・職業・居住地・取次者・取立者・師匠・入門日・伝授の内容などである。

本資料の特徴の一つは、玄人・素人の区別なく太鼓観世家に入門した弟子を記録する点にあると思われる。

ちなみにこの 140 年間の太鼓観世家は、11 世重道、12 世元恭、13 世元常、14 世元規、15 世元継、16 世元信と、6 代にわたる時代である。筆録者を断定することは難しいが、13 世元常が過去の記録を書き写す形で書き始め、14 世元規・15 世元継・16 世元信と、その周辺の人物が加筆した可能性が高く、第一級の価値を持つ資料と言える。

(2) 「入門」の意味の変遷の解明

『入門者摘録』(全 2 冊)および『元規遺事』(14 世観世元規著、太鼓観世家蔵)に見る「入門」の特徴には次のような事柄があげられる。

玄人・素人の区別なく太鼓観世家に入門した弟子を記録している。

入門と同時に「脇能」を伝授されている場合が多い。

弟子が入門に際して、起請文、または誓約書を提出し、師家への尊崇、および秘事を口外しないことなどを誓っている。

起請文、または誓約書を差し出した弟子に対して、家元が「入門済ノ証」を発行する手順を踏んでいた。

以上を検討した結果、14世観世元規までの「入門」とは、「観世一門に加入」することであった。すなわち、起請文、または誓約書を提出した弟子に対して宗家が許すものであり、習物の相伝を行う段階でなされることが多かった。

しかし、現在の「入門」は、免状の一種として「御稽古初めて約半年の間にとって頂きます」（『改訂版 観世流太鼓手附・下』16世観世元信、2019年、檜書店）とあり、弟子が誓詞などを差し出すことはない。

このことから、14世元規までの頃と現在とでは「入門」の意味が変わり、手続きも簡略化されていることがわかった。

（3）近代の太鼓方観世流役者の動向の解明

『元規遺事』に載る「流儀弟子氏名」を見ると、幕末および明治期に活躍した太鼓方観世流の役者は太鼓観世家の13世観世元常・14世観世元規以外に61名を確認することができる。

その内訳は以下である。

幕府に召し抱えられた役者8名。

藩に召し抱えられた江戸住の役者4名。

藩に召し抱えられた京都住の役者3名。

藩に召し抱えられた国住の役者36名。

その他10名。

このうち、明治維新以降の活躍が認められる役者は18名であった。

項目ごとの内訳と役者名は以下である。

なし。

1名（松村言吉）。

2名（小寺正藏・小寺隼之助）。

8名（藤本長右衛門・藤本純吉・永田力蔵・本木源八郎〔はじめ江戸詰〕・岡部平蔵・中島勇吉・安井橋平・鬼頭八郎）。

7名（松村末男・伊藤官左衛門・鬼頭為太郎・江田平三・寺村銀次郎・木山惟貞・牧野平八郎）。

以上のことから、公儀をつとめた家柄で明治維新以降に太鼓方観世流であり続けたのは、太鼓観世家の2人（13世元常・14世元規）だけであることがわかった。また、藩に召し抱えられた江戸詰の役者は松村言吉だけであった。残り17名は地方で活躍した役者、または明治維新以降に活動を始めた役者であった。

つまり、太鼓観世家を除いて、松村言吉だけが、江戸期から太鼓方観世流であった実績を持ち、明治維新以降に東京で太鼓方観世流をつとめた唯一の役者ということになる。しかも、言吉の実家は公儀の役者で宝生座座付の太鼓方観世流である高安家であった。そして13世元常の母が言吉の伯母であり、太鼓観世家と親戚関係にあったのである。

14世観世元規は明治7年に内務省に勤めることとなり、明治30年頃まで、能楽の世界から離れていた。その間、松村言吉が太鼓方観世流の役者として芸事を担っていくことになる。『入門者摘録』（全2冊）には、14世元規が、習事を伝授し言吉が舞台活動を行うための環境を整えるなどの補佐をしていたことが記されている。

以上のことから、元規と言吉は連携をはかり、太鼓方観世流の活動範囲を広げたことが言えるのである。

（4）研究成果報告書『能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相 』『入門者摘録』（全2冊）研究』の発行

『入門者摘録』（全2冊）の翻刻などを掲載した研究成果報告書『能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相 』『入門者摘録』（全2冊）研究』（編集・発行、三浦裕子。240ページ）を2020年3月31日に発行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三浦裕子
2. 発表標題 能楽囃子太鼓方・観世元信家蔵『入門者摘録』（全2冊）研究序説 14世家元・観世元規による伝授を中心に
3. 学会等名 楽劇学会第25回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三浦裕子
2. 発表標題 明治期の能楽囃子太鼓方観世流－14世宗家観世元規と弟子の活動をめぐって
3. 学会等名 東洋音楽学会第70回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三浦裕子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 科研費による報告書	5. 総ページ数 240
3. 書名 研究成果報告書・能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相－『入門者摘録』（全2冊）研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小林 責 (Kobayashi Seki)		武蔵野大学名誉教授。武蔵野大学能楽資料センター元センター長。2018年5月、逝去。

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	加賀谷 真子 (Kagaya Shinko)	教授	ウィリアムズ大学（所在地はアメリカ・マサチューセッツ州）教授。武蔵野大学能楽資料センター研究員。
研究協力者	氣多 恵子 (Keta Keiko)		近世日本文学研究者。2018年3月、退会。
研究協力者	高橋 葉子 (Takahashi Youko)		京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員。武蔵野大学能楽資料センター研究員。
研究協力者	土谷 桃子 (Tsuchiya Momoko)		岐阜大学教授。
研究協力者	中司 由紀子 (Nakatsuka Yukiko)		法政大学能楽研究所兼任所員。
研究協力者	深澤 希望 (Fukazawa Nozomi)		相模女子大学非常勤講師。
研究協力者	別府 真理子 (Beppu Mariko)		武蔵野大学能楽資料センター研究室員。